

コラム

目に焼き付ける記憶

人はなぜ「見たい」と思うのか

(二〇二五年五月二十四日執筆 文章内は敬称略)

コンタクトレンズ

執筆…石川 享佑

毎朝、コンタクトレンズを目に入れるのが苦痛で仕方ない。僕ではなく、息子の話だ。

うちの息子は、五歳のときに斜視と診断された。親の僕では全く気づかなかったわずかな歪みを眼科の先生はすぐに見抜いたから、すごいなと思ったのを覚えている。保育園の眼科検診で判明したんだった。息子の親権を取り戻して、僕の母が勤めていた保育園に入園させてもらって最初の眼科検診だったと記憶している。

息子とは、三歳のときに一度、別れた。最初の妻と離婚する際に最後の引越を手伝ったときのこと。家具

や家電を揃えて、2トトラックで何

往復かしたんだった。「最後だから」

と、少し遅めの昼食を取って、最後

の別れを告げたとき、息子はかつて

ないほどに大泣きして、駄々をこね

たんだった。飲食店の駐車場で寝っ

転がって泣いている息子を見て、一

度抱き上げて「また、すぐ会えるか

ら」と言って車に乗せたのが三歳の

息子を見た最後だった。

あのときの息子の大きくする姿

は、今でもときおり思い出す。その

ときの服だって思い出せる。息子が

気に入っていたカーキの半ズボンに

白の半袖のシャツ。青いボーダーが

入っていて、色白の息子によく似

合っていた。幼少期の僕にそっくりなその顔が涙で染まるのは、まるで幼い自身の涙を見ているようで、心臓を鷲掴みにされたような苦しさ。僕の記憶に深く刻み込ませて、今でもときおりシクシクと痛む。それにしても、愚かな父親であった。

それから二年、息子がどうやって生活をしていったか、詳しくは知らない。とにかく、そこからの二年のうちに、息子は斜視になっていた。眼科検診を終えて、すぐに母が息子をかかりつけの眼科に連れて行ってくれて、精密検査をしたところ、左右の差が大きく、右目がほとんど見えていないということが分かった。

ありがたいことに、見つかったのが早かったこともあり、矯正すれば普通の生活が送れるし、手術の必要も無いだろうと言われた。本当に眼医者さんにも母にも頭が上がらない。その日、帰宅したら、メガネ姿の息子がテーブルの前にちょこんと座っていた。僕は裸眼の視力が良く、コンタクトはおろかメガネもか

けない（ときおりブルーライトカットのメガネはかけるが、それも最近の話だ）。メガネをかけた息子を見て、それまで「自分と瓜二つ」だったはずの息子が、急に別人に思えた。思えば、あのときから父子の葛藤というのは始まっていたのかもしれない。

数日後、息子を膝に乗せてスマホのカメラで自撮り写真を撮った。息子は「メガネくん」と呼ばれるのが大嫌いだ。それで「メガネの何が大嫌なのか」と叱咤激励する意味を込めていた。その後、何台もスマホを変えらる中で、その写真はどこかにいつてしまったのだけれど、そこには屈託なく笑う息子と絶望的にくたびれた中年男性が写っていた。本当のことを言うと、きっと僕が一番、息子のメガネ姿を見るのが嫌だったんだろうと思う。息子の身体に、取り返しのつかないような傷を負わせてしまったという後悔と無念さ、そしてきつと前妻への恨みもあったんだろうと思う。

息子を膝に抱いてから、十五年以上の月日が経った。もうかわいげのなくなった息子だけれど、朝起きてコンタクトレンズを入れるのに苦戦している姿を見るたびに、かつての自身の愚かさへの呪いの気持ちと、息子への申し訳無さが衝き上がってくる。今では随分と大きくなった手が、まだ僕の半分くらいしかなかったときに、どうして離してしまったんだろう。泣いている息子を抱いたときに「泣き止んで」なんて言わずに、泣き止むまで抱きしめてやることがどうしてできなかったんだろう。

後悔がどんどん湧き上がってくる前に振り払うようにして家を出る。それでも追いかけてくるかつての無念さから逃げるように自転車漕ぎながら日盤吉方に向かう毎日だ。

きつとこの痛みは「北斗の拳」のケンシロウの胸に刻まれた北斗七星なのである。息子を守れなかった過去の弱かった自分に刻まれた傷を、僕はこれからは背負って生きねばな

らないのである。いや、きつと僕自身が望んでこの傷を残しているんだろう。弱かった自分を決して忘れること無く、もっともつと強く生きることが出来る自分であるために、これだけは忘れてはならぬ記憶なのだ。

カンブリア爆発

コンタクトの話から始まったが、今月は「見る」ということについてコラムを書いてみたい。本当は四月の九紫火星の月に書きたかったのだけれど、どうにも間に合わなかったで、リベンジである。

生命が「眼」を獲得したのは五億四千年ほど前。地球が生まれて四十六億年とされるが、生命が生まれたのは、七億年ほど時間が経った三十九億年前とされる。当初の生命はバクテリアや藻類などの単細胞生物ばかりであった。その頃の地球は、きつと静かで穏やかな天体だったのだろう。

そんな静けさが随分と長く続き、

十億年ほど前になってようやく多細胞生物が出現する。今で言うナマコだとかクラゲのような生物が出現し始めるのである。彼らはまだ目を持っていない。見るという手段以外で獲物を捕獲していたのだろうと予想する。

そして五億四千年前、突如として多種多様な生物が出現しはじめる。それまではフニャフニャで頼りないような身体しかもたなかった生命が、急に硬い甲羅に身を包みだし、また、その甲羅を破るような牙を持ち始める。こうした新たな生物がある時期を境に急激に海で活動をはじめるのである。この時期を「カンブリア紀」と言い、生物の爆発的な進化もしくは多様化を「カンブリア爆発」と呼ぶ。テレビ東京系列で「カンブリア宮殿」という番組があるが、その「カンブリア」はこのカンブリア爆発を指している。

この生命の爆発的な進化・多様化をもたらした要因の一つとして指摘されているのが「眼の獲得」であ

る。カンブリア紀以前は、眼を持った生物が全く発見されないのに、どういうわけか生命はカンブリア紀以降、みな眼を持つようになったのである。

光を感受することと、眼を持つことは似て非なるものである。単細胞生物であっても光を感受して運動の方向性を決める。向日葵を見ればわかるように、植物も確かに光を感受している。だけど、光刺激を「像」として結び、映像として形成する力は彼らには存在しない。この光刺激を映像へと昇華させる力を視覚と呼ぶのである。

この「視覚」を持った生物は、より多くの捕食が可能になり、したがって盛んに繁殖が行え、繁栄していった。もちろん、他の種もまた視覚の獲得に動き、反撃・逃避能力を備えるようになり、イタチごっこのように進化は進化を呼んだわけだ。つまり生命に大いなる進化と変化をもたらしたのは「眼」なのである。進化論で有名なダーウィンも、こ

の眼というものの理解にはなかなか苦しんだようだ。彼は有名過ぎるほどに有名な著書「種の起源」において、このように述べている。

「比類のないしくみをあれほどたくさんそなえている眼が、自然淘汰によって形成されたと考えるのは、正直なところ、あまりに無理があるように思われる。」

そうなのだ。眼というのは、あまりにも複雑な器官なのである。キリンの首が少しずつ伸びたというのは、まだ自然淘汰の過程の中の進化として納得できないことはない。象の鼻が伸びたのだって、納得できる。だけど、眼ほどに複雑な構成をしている器官が「徐々に」作られたというのは、どうしても納得がいかないのである。ダーウィンを悩ませ、唸らせたのも共感できる。

我々はもっとも「眼」を知るべきだと思う。知ることとは、そのまま愛することだと思う。愛するほどに、知りたいと思う。身体を知るといことは、そのまま身体を

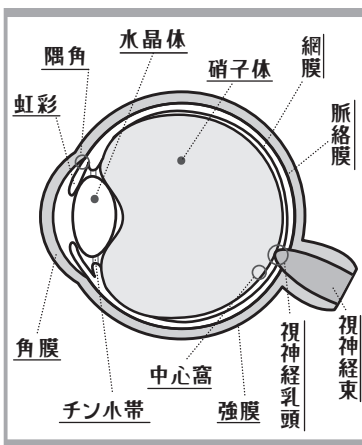
愛することなのである。

現代人はあまりにも身体をおざなりにしすぎている。無理をしても栄養ドリンクを飲めば良いと考える人は一定数いるし、病気になったら病院に行けば良いと思っている人がほとんどだろう。一度崩れた親子関係が、なかなか修復できないのと同じように、身体もまた薬を飲んだところで完全に修復できるようなものではないのである。

眼の一番表面にある「角膜」は五つの層で形成される。その最下層にある「角膜内皮細胞」は一度死んでしまうと再生はされない。神経細胞も中枢に近い部分はほぼ再生はされない。よく「トカゲの尻尾切り」と言われて、トカゲは身体を再生させる力が強いように言われるが、実は再生できるのは一生で一回限り、しかも尻尾の中の筋肉や血管は再生できるが、骨は再生されていない。これは「幹細胞」の存在の有無によるのだが、人間の身体の一部の部位には幹細胞が存在しないため、傷を

負ったら再生できないものもあるのである。ちなみにアカハライモリは幹細胞から諸細胞への分化だけでなく、諸細胞から幹細胞への「脱分化」の仕組みを持っているため、何度でも再生できる。この仕組みを人間の再生医療にも応用しようと研究が進められているが、実現するにはまだまだ時間がかかろう。

さて、話が逸れてしまった。とにかく人間の身体というのは、もっともっと一般の人も大切にすべきものであり、さらに眼というのは身体の中でもとりわけ複雑で精密であるということ伝えておきたい。「見る」という行為そのものを考える前に、少しいだけ「眼」というものを学んてみたい。



眼の構造

人間の眼には約百数十万本とも言われる視神経の線維束が走っている。一億三千万個以上とも言われる神経細胞が光の刺激を捉え、網膜に映し出した映像をこの百万本以上もある神経が脳に伝え、映像化しているのである。これほどに膨大な数の神経線維が走っているということは、人がいかに「見る」ということを大切にし、目から入る情報を必死に収集しているかということの証左と言えるだろう。

カンブリア爆発から始まった、種の生存競争を生き抜き、霊の長たる存在として地球上をある意味での支配をした人間も、「見る」ことなしに今の地位を築くことなどできなかったろうと思う。

他の動物の視神経細胞の数などはどうなっているのかと気になって、少しいだけ調べたけれど、信頼にた数字は出てこなかった。ただ、おそらく人間の視神経線維の数は、犬や

猫よりも多いだろうと予想している。

もう少し丁寧に眼の構造を書いてみたい。まず、最初に光が侵入するのが「角膜」である。これは黒目と理解してもらえばいい。レーシック手術はこの角膜にレーザーを当てて角膜のカーブを矯正し、光の屈折率を調整して近視や遠視、乱視を矯正する。

角膜に入った光が全て網膜に投影されるわけではない。角膜の奥には「虹彩」という「絞り」に相当する器官が存在する。これは「茶目」と呼ばれる部分になる。この虹彩は内部の平滑筋（不随意筋）の働きによって開いたり閉じたりして、眼に入る光量を調整する。この虹彩と角膜の間には「隅角」と呼ばれる部分があり、そこには「シュレム管」と言って眼房水という眼を潤す水分を排出する管がある。だから、この隅角の部分には一定の血圧がかかっている（眼房水も血から作られるからだ）。この血圧を「眼圧」と呼ぶわけだが、

これがどういう訳か高まってしまっている「緑内障」という病気だ。今のところ、まだまだはっきりしていない病気であるが、「眼」であり「血圧」が関与しているのだから、九紫火星の病気で鑑定すれば良いんだろう。何年か前の認定講師試験でも緑内障の象意を問うような問題が出たと聞く。気学の鑑定をする人は、こうした身体の構造と病気の機序を知っておいて損は無いと思う。

さて、虹彩の内側を通過した光は水晶体に入る。ここも角膜同様に光を屈折させる部分で白内障はこの部分が加齢によって濁ることである。白内障の手術は、水晶体の濁った部分を超音波を用いて吸い出し眼内レンズを入れる。こういうところは「西洋医学すげーな」と感嘆させられるところである。ちなみに、水晶体は若干黄色がかっている。これはこの奥に存在する網膜などを傷つけかねない紫外線を遮断するためであるらしい。つくづく「人間の身体ってのは、すごい構造をしているな」

と思う。

水晶体は「チン小帯」という帯で吊るされていて、このチン小帯が水晶体を引っ張ったり緩めたりすることで水晶体は薄くなったり厚くなったりする。近くを見る時は分厚くなり、遠くを見る時は薄くなる。だから、水晶体はカメラのレンズに例えられることが多い。

妻は写真が好きな人で、以前はデートや旅行の際には常に一眼レフカメラを持ち歩いてた。最近はずばらスマホのカメラだけれど、小さい身体で構える大きなカメラのギャップが可愛らしくて、その姿にいつも見惚れてしまっていたのを覚えてる。だけど、実は我々はさらに高性能の一眼レフをその身体にすでに持っているのである。僕は昔から目が良く、未だに裸眼で1.0以上あるもんだから、こうした「目」の持つ凄さをあまり気にも留めていなかった。だけど、やっぱり自身の身体に感謝しなきゃいけないな。

水晶体を通過すると、光は硝子体

を通過する。「硝子」と言う通り、コラーゲン線維と水でできたガラスのような透明な部分だ。目の体積のほとんどを占めるこの硝子体も光を屈折させる働きを持つが、それ以上に眼球の形を保つために必要な器官である。この硝子体がまんまるだからこそ、我々（に限らず動物全般）は眼球を色々な方向に動かすことが可能になる。この硝子体のさらに奥に「網膜」があり、ここに光が到達して投影される（カメラのフィルムのようなもの）ことによって、はじめて我々は光を「像」として認識できるようになる。

この網膜からは視神経がたくさん伸びていて、受け取った映像を脳へと送る。とりわけ「中心窩^か」という領域には椎体細胞が集中しており、高度な色彩の認識を可能にしてくれている。この「中心窩」から少し離れたところに「視神経乳頭」という神経が集まって膨らんでいる場所があるのだけれど、この領域だけは「見えない」場所である。俗にいう「盲点」

を作り出してしまうのが、この部位なのだ。これは構造上、どうしてもできてしまう場所で、すなわち人間というのは、誰しも「盲点」を持っているのである。日常生活で盲点が気にならないのは、どちらかの目の盲点の部分の逆の目の視覚で補っているからである。もっと言えば、「見えていないものを見えたように、脳がごまかしている」のである。

さて、この網膜を覆うのが「脈絡膜」だ。別名「ブドウ膜」である。写真を暗室で現像したことがある人なら分かると思うけれど、光が入ってしまうと像をフィルムに現すことができないのだ。だから、網膜を暗闇の中に閉じ込める必要がある。そのため暗幕を人体はどうやって作るかというと、なんと「血液」でカーテンをするという技に出たのだ。目は血でカーテンを閉めて、眼球の中を真っ暗にして、網膜に像を焼き付けている。もう「眼に足を向けて」眠れないな。そもそも眼に足を向けて寝ることができるかどうか。相当

に身体が柔らかい人ならできるだろうが。血で作った葡萄色のカーテン。それが脈絡膜である。

この眼球を守るために、一番奥に存在するのが「強膜」である。この「網膜」「脈絡膜」「強膜」の三層構造で眼を覆っているのである。

この三層の膜を貫通するようにして走るのが視神経だ。視神経は後頭葉にある大脳視覚野に向かって伸びる。前についている眼の神経が後頭部にあるのがどうにも不思議だ。しかも真っ直ぐ走るのではなく、視交叉といって、眼のすぐ後ろで交差して走っている。さらに驚くのは右眼球、左眼球ともに右視野は脳の左半球に、左視野は右半球にと伸びる。それゆえに下垂体腺腫などで視交叉の中央部が障害されると両耳側半盲（右目も左目も外側半分が見えない）という現象が起きる。どうしてこうも不思議な構造を作ったのか。以前、お笑いコンビ「ガンバレルーヤ」のよしこが患ったのも下垂体腺腫で、彼女は代謝異常（下垂体は成長ホル

モンを分泌する）と視覚の異常で病気に気づくことができたと言う。もし、視神経が交叉していなかったら、彼女は半盲ではなく全盲になっていたのかも知れない。そうしたリスクを低減させるために、生命は視神経を交叉させることを進化の過程で得たのか。実際のところは分からないが、生命の進化のロマンを感じさせてくれる。それにしても、よしこは早めに気づくことができ（といっても、腫瘍は3センチに達していたと言うから、早期発見とは言えないかも知れないが）失明を免れることもできたから良かった。多忙を言い訳に、身体から目を背けてはならないということを教えてくれたニュースだった。

僕はこう見えて解剖学が好きな人間で、構造を知るほどに人体の凄さのために息をついている。だけど、解剖というのは、当然だけれど「静止しているという意味で」死んだ情報だ。実際にはもっと人体は躍動している。それを忘れると、人体を

見るときに見落としてしまうことが多々ある。以前も書いたと思うが、「決めれば消える」のが人体であり生命である。これからも、それを忘れないようにしたい。

見る力、表現する力

視覚情報を活用し、運動能力で劣る人間は生き残ってきた。できるだけ早く敵を見つけ、また敵の急所を見つけては先制攻撃を仕掛ける。見えなければ、人間など野生では何もできないのである。

この「見る力」をさらに発展させようと考えたのが人間が「霊に長たる」と言われる所以なのだろう。人間は視覚情報を自身の内部だけに留めるのではなく、外界に対して表現し、保存することを考えた。そう、「絵画の発明」である。

世界最古の洞窟絵画であるショーベ洞窟（南フランス）の壁画は、現代と比べても遜色ないほどの腕前の絵画が描かれている（ただし、最近ではショーベ洞窟よりも以前の絵画

が発見されつつある)。ぜひ、ご自身でネットで検索していただきたいが、およそ三万年前の絵画とは思えない正確さで、狩りで得たであろう鹿や馬、牛を描いている。明らかに古代の人々は「見る力」が高く、しかもそれを正確に表現する技法を持っていた。

日本でも縄文時代早期の「女神像線刻礫」(愛媛県・上黒岩岩陰遺跡)など一万年以上前の壁画が発見されている。紀元前一世紀には色も使われている遺跡も発見されている(愛知県・一色青海遺跡の鹿の絵画土器)。さらに時代が下れば七世紀や八世紀になるとキトラ古墳に代表されるような美しい壁画が描かれるようになる。

こうした絵画によって、人は自身の見たもの(実際に見たかどうかは別として)を「他者に」「正確に」伝えられるようになった。

ところが、歴史上最も古い壁画が発見されたヨーロッパでは、「見たものを正確に写し取る」という行為

がある時点でストップする。キリスト教の「創造は神のみがなせること」という考えの影響により、絵画におけるクリエイティビティというのはほとんど失われてしまったように思う。

そうした停滞を打破したのが「ルネサンス」である。ヌードを解禁し、人を人らしく、創造的に描くという行為を取り戻したヨーロッパは、停滞した期間を取り戻すかのように「写生」に没頭する。レオナルド・ダ・ヴィンチなどの天才を経て、西洋の「写生」は印象派に結実する。

印象派の代表であるクロード・モネは、おそらく人類で最も「正確に視覚を写し取った画家」であろう。「睡蓮」に代表される彼の画は、もはや「写真」と言っているほどに光を正確に捉えているように思う。いつだったか、妻と出かけた美術館にモネの画が展示されていて(レプリカだったかも知れないが)、そのリアリティに圧倒された。

ちなみに「睡蓮」はモネの晩年の

作品であって、その頃、彼は白内障に苦しんでいたというから驚きだ。人間の「見る力」、そして「見たものを保存する力」というのは、確かに人間が進化するのに欠かせなかった。

そういえば、鍼灸学校の一年生のときに、人体の色々な細胞を顕微鏡で覗いては、スケッチするという授業があった。僕のクラスは社会人が数名いたのだったが、どうしてか僕のグループは僕を含めてオジサン、オバサンばかりだった。みんなして「目が!目がああ」と苦しんだのを覚えている。比較的、目が良かった僕は、さっさとスケッチを終えた。

課題となっていた数種類のスケッチを終えた後は、特にやることが無くなってしまった。先生は「もう単位はあげるから、授業に出なくてもよい」と言っただけで、どうせ、その後も授業があるから帰るのも面倒くさい。そこで、教室にあった別の細胞のプレパラートを見ては、スケッチして楽しんだ。

プレパラートは数十種類もあって、赤ん坊の骨細胞だとか、膀胱の細胞だとかもあった。血液のプレパラートは僕を大いに興奮させてくれた。膀胱は「移行上皮」という珍しい形の上皮だったから、それも面白かった。赤ん坊の骨細胞は大人のそれとは全然違って、瑞々しさを感じさせるものだった。ちなみに大人の骨細胞のプレパラートは、枯れ木にしか見えないようなものだった。赤ん坊の骨は代謝が非常に活発だから、瑞々しく見えたのだと思う。

また、他の先輩方のスケッチも見せてもらった。ものすごくリアルで、本当にプレパラートがそこにあるようにさえ思えるような人もいた。「何で美大じゃなくて鍼灸学校に来てるんだよっ!」とツツコミを入れたことも一度や二度ではない。

僕はといえば、まあ単位が取れるくらいには形は捉えられていたのだけれど、それまでのこと。僕のセミナーを受けた方は分かるだろうけれど、絵のセンスはほぼ無いに等しい。

もし、絵のセンスがあれば、もう少し身体の構造の理解も早く進むんだろうけれど。まあ、顔が良いからいつか。

人はなぜ見たものを記録したがるのか

モネによって「見たままに写し取る」という技法は完成された。それでも人類の「見る」ことへの欲求は

収まらない。モネ以降のヨーロッパでは、写真からピカソに代表されるような抽象画へと写っていく。つまり「外界から得た情報を外界に表現する」ということから、「自身の内面を外界に表現する」ことへと興味は移っていったのだろう。外界を見るよりも、内面を見るほうが難しい。それでも、人は自身の内面を見つめ、それを表現したいという欲求に駆られたんだろう。

そういえば、曼荼羅なんていうのは、ある種、宗教者の内面の表現と言ってもいいのではないか。何年か前に高野山に行った際に、胎蔵曼荼羅と金剛界曼荼羅を見たけれど、あ

れも実際に外界に存在したものではなく、内面に存在したものを確かに作者が見て、それを表現したのだ。そう考えると、東洋の美術というのは、西洋のその何百年も先を行っていたのか。仏教芸術というのは、もっともっと評価されるべきだと思うわけではない。

そうだ、モネは「光を捉え描いた人」と述べたけれど、「雨を捉えて描いた最高の人」は歌川広重だと妻に教えてもらった。妻は大学で美術史（西洋）を専攻していたから、こうした分野に非常に明るい。だから、妻と美術館や博物館に出かけるのは楽しいのである。そういえば一番最初のデートは長崎の県立美術館だった。そのときは「クリムト」の展示が行われていて、有名な「接吻」を見て感動したのを覚えている。

話が逸れてしまった。外界を見て映し出す技法がモネ以降、あまり興味を持たれなかったのは「カメラ」の登場もあると思う。このカメラというのは、実はその原理はアリスト

テレスの時代には既に知られていた。実用化されるのは、それから随分と時間が経った十九世紀の欧州。最初に成功したのはフランスのジョゼフ・ニセフォール・ニエプス。その後はアリストテレスもびっくりのスピードで進化を遂げ、その時代をフィルムに収め続けてきた。ニエプスから170年もするとプリクラなんていうものが流行り、女子高生の「プリ帳」を写真で覆い尽くすまじになった。そしてニエプスの成功から約二百年となる現代は、手のひらサイズのスマホの中に、超高機能のカメラが内蔵され、そのおかげで僕は日々、愛猫の愛くるしい姿を映し出すことができるようになってい

る。さらに映像はデジタル化され、あらゆる日常を記録し、データサーバーに蓄積させ続けている。西洋医学を発展させたのは、明らかにこの「カメラ」によるものだと思う。もう少し遡って、顕微鏡の発明からとも言った方が良いかも知れないが、

とにかく「光学」が西洋医学を発展させた。顕微鏡で細胞を見るようになるまで、西洋では「とにかく瀉血」というのが医学のセオリーだった。それが細胞を見ることによって、細菌群を発見し、その構造を理解し、最適な薬を合成するようになったのである。今ではさらに小さなウィルスまでも見ることができ、四百種類にも上るウィルスのゲノム配列まで見つけ、全てをデータサーバーに記録している。

絵画にしろ、写真にしろ。とにかく「記録に残す」というのは、本能的な欲求なのかも知れない。もちろん、こうした文章を残すのもまた、同一の欲求なのだろう。僕は絵で記録を残すのが苦手だから、こうして文章を書き殴りつづけているのだろう。

しかし、なぜ人は本能的に記録を残そうとするのか。僕にはとてもではないが答えなど出せそうにないが、もしかしたら人は「永遠のいのち」というものをどこかで信じてい

るのではないか。

僕のいのちは永遠なのである。肉体は当然有限だけれど、いのちそのものは不滅なのだと思う。遺伝子という意味でも、僕の遺伝子は息子に引き継がれ、そのまた子どもにと続いていく。ここまで学んだ気学や易学、さらに東洋医学は、受講生の皆さまや読者の皆様、また当社のスタッフやまだ見ぬ未来の従業員たちが引き継いでくれるに違いない。彼らの中で僕が生きていることができれば、僕のいのちは不滅なのである。

だとしたら、僕の肉体がこの世から消え去っても、どこかに僕のいのちは必ず転がっているはずで、僕はそうした未来の僕へと手紙を残すかのように、こうして文章を残しているのかも知れない。

られない。その恐怖を克服するため、人間は宗教を生んだ。二度目の死を避けるには、自身の死後も何かしら「自分が生きた証」が残れば良い。そう考えると、人間は二度目の死の恐怖の克服のために、本能的に記録をし続けるのだらう。

デジタル化は記録を劣化させずに保存することを可能にした。僕の執筆した「占いで知る！ココロとカラダのヒミツ」と「いのちのスケッチ」（天地人三部作）に関しては、国会図書館に入っているから、日本国が無くならない限りは保存される。おそらくデータ化されていることだろう。とりあえず、二度目の死は訪れずに済むのだろうか？

さて、随分と長々と「見る」「記録する」ということを述べてきた。この「見る」というのは、すでに述べたように九紫火星の働きである。さらに記録というのはモノクロであれば一白水星だが、その色彩、すなわち光を含めた記録は九紫火星である。いずれにせよ、見るも描くも九

紫火星の働きであり、そして九紫火星には「祈り」「信仰」の意味があり、また登場するのは最も遅れているから「最高」の意味がある。

つまり、人間の見る力、記録する力というのは、最高の力なのである。この最高の力を存分に活かして、

我々はより良き世の中を作っていかなければならぬのである（念の為に申し上げておくが、この一節は決して盲目の人に対して貶めるような意志も、また晴眼の人が優越感を持つのを推奨することを意味しない。僕は鍼灸師という職業柄、盲目の人に対して非常に強い尊敬心を持っているから、その点は誤解なきようお願いしたい）。生命が獲得した「眼」という九紫火星の力。同じく九紫火星の象意であるのが実は「核兵器」だったりする。

一九四五年に被爆した長崎で撮影された少年におんぶされた男子（当時三歳）の写真。戦争の悲惨さを現代に伝える重要な写真の一枚だ。二〇二二年、実に七十七年経っ

て、そのご本人が名乗り出た。かつて、おぶわれて戦火を目の当たりにした竹本秀雄さんは、インタビューの際に「あのかわいい目はどこに行っただんじょうか…。七十七年間、いろんなものを見てきましたから」と語ったのは記憶に新しい。

人類の叡智でもある「核エネルギー」が映し出すのが、荒廃した都市と悲しみに暮れる人々で良いのか。九紫火星は光の輝きのはずなのに、僕はあの写真に光を見いだせない。こんなものを見るために、人類は眼を獲得し、進化させてきたのか。今月の暦の最終日は八月六日（正確には七日の14…52が立秋）だ。夏の日差しの下、かつての愚かな殺戮を悔い、希望の光を見出す世界になることを祈りたい。

月刊気学のInstagramでは出張中の飲食を載せていますが、変えないとね。
@gekkan_kigaku

